

辻地蔵堂

加藤 照廣

はじめに

辻部落のほぼ中央の三又路（「来鉢井路之碑」が立っている）を北へ約百米の処に地蔵堂がある。冬之地蔵講の記憶：戦前・戦後の一時期、その夜甘酒を振舞っていた。甘酒は各戸回り持ちで下市の麴屋に行つて買っていた。

当時は自家用車は今のよう普及していない時代であつたから、下市まで徒歩で、麴を袋に入れて提げたり、担いだりして係の家に届けていた。

講の当夜は堂前庭で焚き火をして暖をとりながら甘酒を味わつた。あの頃は隣り部落の中園の人も参加していた。なお平成八年台風で前庭の銀杏の大木の枝が折れて、堂の屋根に倒れかかり瓦が破損し葺きかえ、堂内、堂壁を修理し今日に及んでいる。

本稿は長年地域住民に親しまれてきた辻地蔵堂の由来についての記録である。

地蔵菩薩像—来鉢辻地蔵本尊

一、木造地蔵菩薩像

地蔵堂本尊の木造地蔵菩薩像の台座背面に左記の三行の文字が記されている。

明治三十年

酉旧三月吉祥□

施主 加藤嘉作

二行目の□は文字の右側の一部を残して、大部分は消えていて、判読できない。吉祥に続く字であるから、「日」ではないかと思う（吉祥日は吉日と同意）。明治三十年は一八九七年、酉の年、旧暦三月吉日に加藤嘉作が寄進したことを示している。加藤嘉作は「来鉢井路之碑」に副総務として、その名を連ねている。井路の起工は明治三十一年五月である。地蔵像寄進はこの前年のことであつた。

* 嘉作・・・弘化元年十月十四日生、大正九年一月十八日死去。享年 七十五歳

地蔵像の背面略中央に、横約四七ミリ、縦約百五ミリ、厚さ一〇ミリの蓋がある。この蓋を開けると左の墨書きの注記がある。

「加藤清光奉再興加者也

干時宝永二乙酉天二月中旬

大佛師玄俊学正敬白之

* 奉再興加・・・再興しおくり奉る

* 寶永二乙酉天・・・寶永二年乙酉の年（一七〇五年）

* 敬白・・・うやうやしく申し上げる

この蓋を取り外すと、蓋の厚さと同じ一〇ミリの凹みがあつて、その内部の表面、菩薩正面の裏側にあたる部分に左の注記がある。

来鉢邑

如意山延命寺

本尊

右の二つの文面によれば、加藤清光なる人物が寶永二年(乙酉)二月中旬、来鉢村、如意山延命寺を再興し、本尊として佛師玄俊学正作の地藏菩薩像を安置した。延命寺は一旦衰えて廃寺となり寶永二年、再興されたが、再度廃れたのであろうか、何らかの事情で、この地藏菩薩像が施主加藤嘉作家に伝えられていたと思われる。

*加藤清光については、「来鉢神社由緒資料」の来鉢神社銘文の項に、左記①②の記事がある。

① 貞享元年の棟札 (貞享元年——一六八四年)

「伏冀府城太守松平對馬守源照重公武運長盛加藤市左工門藤原清光」

*松平對馬守源照重：府内藩主・大給家系図に「照重」

の名は見えない。ただ貞享元年当時の藩主は相模守近陣(ちかのぶ)である。

② 寶永二年の棟札 (寶永二年——一七〇五年)

「奉造管来鉢村和尚権現社拜殿一字願主当所加藤市左工門並氏人中」

二 地藏菩薩

地藏はKṣiṅgarbha, kṣiti(大地) garbha(胎、包蔵)を合わせ

た語、菩薩は世のため、人のために慈悲と利他を實踐して、こ

の世を浄土にするために努力する者のことをいう(仏教辞典)。garbhaは童児を意味するともいわれ、地藏は大地童児神ともいう。

地藏菩薩像は剃髪で左手に宝珠を、右手に錫杖を持つ若い僧の姿であらわされる。辻地藏堂の本尊もこのすがたである。地藏菩薩のことを説く經典に、釈迦が入寂して五六億七千年後に、弥勒菩薩があらわれるまでの間、この世は無佛となる。地藏菩薩はこの無佛の世の人々の救済を委ねられ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道を巡り、人々を救うとされている。

*宝珠、錫杖を持つ姿に定まったのは中世に移る頃といわれる。

地藏は我が国では平安時代の末以来、現世でも来世でも利益のある菩薩として、一般に信仰されるようになった。来世の地獄の存在を信じ、そこに墜ちることを恐れる人々は、地獄の苦しみを代わりに引き受けてくれる地藏菩薩に深い信仰を寄せていった。このような性格を持つ地藏菩薩は「身代わり地藏」「延命地藏」「片目地藏」「子安地藏」「子育て地藏」「水子地藏」「笠地藏」「疣地藏」「首無し地藏」などとして信仰され、また、子どもを守る地藏として、賽の河原で小石を積む作業に苦しめられている早世した子どもを、親の願いどおりに、賽の河原に向いて、哀れな子どもを救ってくれるという信仰も生まれた(仏教辞典)。

辻の地藏菩薩像が、延命寺本尊と記されているところをみる

と、「延命地藏」と考えられていたのではないかと推測される。

*1 地藏盆・・・旧暦七月二十四日を地藏の日とするのは「地藏菩薩靈驗記」（永祚元年・八九八）による。盆行事を飾る最後の大切な行事とされている。京都の町では新暦八月二十三、四日に行われている。町内ごと、祀られている石地藏の前に屋台を設けて、花、餅、菓子などを供えて、子供たちが百万遍念仏を唱える。新興住宅地では、壬生寺から石地藏を借りてきて地藏盆を行っている（レンタル地藏）

*2 化粧地藏・・・地藏盆の日に子供たちが朝から集まって、「地藏さんお身ぬぐい」をする。石地藏を水で洗い、胡粉などで白、赤、青の顔料を作り、顔、頭、衣に塗って化粧する。これを「化粧地藏」と言い、若狭、丹波、但馬方面、大津、京都、高槻周辺、奈良県の北部や南部の一部にも見られる。

*3 回り地藏・・・地藏のご利益をあまねく受けるため、一定地域で地藏像を巡回させる。現在、山形、福島、栃木、群馬、埼玉、東京、神奈川、愛知、福井、京都、奈良、長崎などで行われている。

毎日、順番に各家を回るのを「一日地藏」、三日間ずつ回るのを「三日地藏」という。（*1～*3：新聞記事）

三 地藏講

辻組（辻隣保班）では、毎年一月二十四日及び八月二十四日

の二回、地藏講を行っている。この講の世話人は、各戸回わり持ちで、当日は、当番の主婦がすべて担当する。寺院（金光寺）住職に読経を依頼し、ご料具並びに参詣者用の簡単な酒肴を準備する。尚、当番は事前に日時を回覧しておく。当日は定刻に講組員（多くは主婦）が参集し、住職が読経する。これが終わると、一同で供物を微小乍ら頂き、かねて用意の酒肴を共にする。

四 十王像（次頁の五、十王図とも『新編仏像図鑑上』国訳秘密儀軌編纂局国書刊行会）

本尊の地藏菩薩像の周辺に十八体の石像が安置されている。このうち十体は十王像である。（別府市・小玉洋美氏教示）

十王・・・「十王経」で、冥界で死者の罪を裁く十人の王、十仏事の成立に応じて立てられたもの。死者は初七日に秦広王、二七日に初江王、三七日に宋帝王、四七日に五官王、五七日に閻魔王、六七日に変成王、七七日に太山王、百箇日に平等王、一周年に都市王、三周年に五道転輪王のところに行つて裁きを受ける（仏教辞典）。十王はみな法衣法冠をつけている。

(1) 秦広王：本地は不動明王。秦広は慈悲広大の意で、慈悲の相を現わす。亡者はすべて初七日にこの王に謁見する。来世の因を作る。

(2) 初江王：本地は釈迦如来。三途の川のほとりに居て、罪の軽重を定める。怒相を現わしている。

(3) 宋帝王：本地は文殊菩薩。宋帝は聡明智略、菩提円満の相を現わしている。邪淫を叱る。

(4) 五官王…本地は普賢菩薩。五官は五刑で刑罰を司どり、身口の七罪を秤量し、記録して閻魔王に報告する。

(5) 閻魔王…本地は地藏菩薩。十王の首・地獄の総主で、罪に対し平等に処する。

(6) 变成王…本地は弥勒菩薩。温容の相を現わしている。五官・閻魔の二王の秤鏡に現われた亡者の姿によって、罪を責め善を勧める。

(7) 太山(泰山)王…本地は薬師如来。閻魔王の太子で、常に閻魔王の傍にいて、人の善悪を記録する。その像は前に紙を置き右手に筆を持って筆記の形をしている。

(8) 平等王…本地は観音菩薩。「我一切をあまねくみな平等に観じて彼此愛憎の心ある事なし」といい、善悪亡人を一子の如く慈悲を垂れ、平等に解脱させる。慈悲円満の相を現わしている。両手掌を組んで膝に置く形をしている。

(9) 都市王…本地は勢至菩薩。あまねく一切を照らし三途を解脱させて、亡者の苦を救わせる。筆を手に記録する形をしている。三途…地獄、餓鬼、畜生の三悪道

(10) 五道転輪王…本地は阿弥陀如来。五道(諸天・人道・畜生・餓鬼・地獄)に住し、仏の教えを説いて、衆生の悪業を摧破する。果の相を現わしている。三周忌のうちに罪を贖い福を求める。追善の多少により、果報の軽重を定めるとされる。

五、十王像図



六、その他の石像

十王像のほか八体の石像がある。

(1) 地藏菩薩像…右手に錫杖、左手に宝珠を持つ立像(二体)

(2) 聖観音像…両手に蓮華の茎を持つ立像(二体)

(3) 合掌する立像、両手に鉢を持つ立像など(五体)

右記の七体はいずれも舟型の光背(船後光、蓮瓣に擬したものとかわれる)を持つ浮き彫りである。

(4) 方形(上部は凸型)の石版に浮き彫りした像(二体)

七、第二十九番札所・霊場

地藏堂の向かって右側の外壁に左記二枚の木札が張られている。

木札¹

「挾間町新四国八拾八ヶ所 第貳拾九番 挾間町ふるさと研究会選定」

四国八拾八ヶ所は四国の弘法大師八十八ヶ所の札所を指すが、「新」を付したのは本来の四国八十八ヶ所になどらえて、挾間町内に八十八ヶ所の札所を選定したものである。八十八ヶ所ならば、弘法大師像がある筈だが、堂内には見当らない。辻隣保班では毎年三月及び八月の各二十一日の二回、「お接待」の日には、日頃は地藏堂の右方数米の位置にある石製厨子に安置されている石造大師像を地藏堂に移して、参詣の人々を接待している。この石像は弘法大師をあらわす持ち物、右手に金剛杵、左手に数珠を持っている。

木札²

「南無大悲観世音菩薩 挾間町第貳拾九番霊場 挾間町ふるさと研究会選定」

観世音菩薩：法華経観世音菩薩普門品第二十五に、「…若し無量百千万億の衆生ありて、諸の苦悩を受けんに、この観世音菩薩を聞きて一心に名を称えば、観世音菩薩は即時にその音声を観じて皆解脱を得しむ」と説いている。(仏教辞典)

法華経観世音菩薩普門品第二十五、右記の続きに「観世音菩薩の名を心にとどめている人々は、たとえ大火の中に墜ちこんでも、かれらはすべて観世音菩薩の威光によって、この大火から救い出されよう。また、人が河に流されることがあつ

ても、観世音菩薩を大声で呼ぶならば、どこの河川においても、すぐ浅瀬が見つけられよう。…もし、ある人が処刑されようとしたときに、観世音菩薩を大声で呼ぶならば、処刑人たちの刀は折れ砕けよう。…観世音菩薩にはこのような大威神力があつて、益する所が多い。…(岩波文庫)

* 1 辻地藏堂は弘法大師の札所であり、観世音菩薩の霊場でもある。

* 2 「ふるさと研究会」の印刷物には、「南無大悲観世音霊場」として第壹番は龍祥寺、第三十三番は維福寺となっている。

* 3 「挾間町誌」に、江戸時代の文化年間(一八〇四―一八)の大分西国三十三所があげられている。挾間町に十五所、庄内町に十所、大分市に八所(野津原二所を含む)となっている。旧石城川村は石城寺のみである。

* 4 西国三十三ヶ所は観世音菩薩を安置する三十三ヶ所の霊場で、西国のほか坂東三十三所、秩父三十三所がある。

* 5 “三十三”は「法華経観世音菩薩普門品第二十五」に、観世音菩薩が衆生を救済するために“三十三”の身に変ずる(無尽意菩薩の質問に対する仏の答え)ことからきている。

変化身三十三：仏・憍支仏・声聞・梵王・帝釈・自在天・大自在天・天將軍・毘沙門・小王・長者・居士・宰官・婆羅門・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・長者婦女・

宰官婦女・婆羅門婦女・童男・童女・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩喉羅迦・執金剛。

八、六地藏塔

六地藏：日本で考案された六人の地藏菩薩(岩波仏教辞典)。もともと地藏は六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天)で衆生・亡者を教化し救済する菩薩であるが、異説がある。

- (1) 胎藏界蔓荼羅：宝処・持地・宝印・堅固意・宝手。
- (2) 惟高伝：光味(鶏亀)・弁尼(陀羅尼)・讚龍(法印)・破勝(法性)・護讚(地持)・不休息(法性)。
- (3) 十王経：預天賀・放光王・金剛幢・金剛悲・金剛宝・金剛願。

*金剛願地藏―地獄道の能化(ここでは亡者を教化する菩薩)で、手に人頭幢を持つ。

*金剛宝地藏―餓鬼道の能化で手に宝珠を持つ。右手は施無畏(甘露印もある)

*金剛悲地藏―畜生道の能化で、如意宝印の手を伸ばし、左手に錫杖を持つ

*金剛幢地藏：修羅道の能化で、左手に金剛幢を持ち、右手は施無畏印。

*預天賀地藏：人道の能化で、人の為八苦を除く。左手に如意珠を、右手は説法印。

*放光王地藏：天道の能化で、天界に住む人が死ぬ時に現れる五衰の苦を除く。

地藏菩薩像図 (1)



金剛願地藏



金剛宝地藏



金剛悲地藏



金剛幢地藏



預天賀地藏



放光王地藏

地藏菩薩像図 (2)



地持地藏



法性地持



宝性地持



陀羅尼地藏



鶏亀地藏



法印地藏

九、地藏堂敷地(土地台帳写し)

公認事由			地券書換年月日		事由		国郡区		所有者氏名	
四十二年八月二十日	四十二年七月八日	明治三十三年七月八日	〃	買得	〃	町村名	加藤 嘉作 外十四名	加藤 雅雄	所有者氏名	

地目等級	反別	地価	外反別名称	地租
六 畑	一〇七	一、一八〇	四十二年八月七日開墾成 印 地価修正	昭和六年三月法律第二十八号ニ依リ 地価ヲ賃貸価格ニ改メ次欄ニ改記ス
宅 一七	七四坪	一七、七六〇		昭和十一年六月法律第三十六号ニ依リ 賃貸価格ヲ改訂シ次欄ニ改記ス
二七		賃貸価格 一〇、三六		
二五		七、四〇		
	二〇七、八一m		四年九月 国土調査完了	

*1 地藏堂敷地の土地台帳公認事由の項

四十一年八月二十日 所有者氏名欄中の加藤嘉作外十四名の氏名は左記の通り

加藤嘉作 加藤 公 木口貞作 藤内ヨネ 安部磯吉
池永牧五郎 加藤茂平 安部庄三郎 江藤江市 加藤孫市
江藤宇三郎 安部新吾 阿南伊八 池永和三郎 池永元五郎
右の十五名はいずれも故人

*2 地藏堂敷地は明治四十一年以来、辻組の右記所有者名簿

十、追録(新聞記事から…十王経、地藏)

に記載する十五名の共有地である。但し現在まで転出入があり、平成十八年現在二十四戸であるが、現辻組の共有地と考えてよい。登記簿上は十五名の子孫ということになる。

(1) 青森県五所川原市の雲祥寺という寺院に、「十王曼荼羅」と呼ばれる地獄絵がある。絵は十王経によって描かれたらしいという。十王経によれば、死者は何度か十王庁で罪の裁きを受けるが、その様子を描いたもの。さまざまな地獄が色鮮やかに描かれていて、鬼たちが死者を責める生々しさには、怖いような迫力がある。

大宰治(本名津島修治)初期の作品「思い出」に「火を放けた人は赤い火のめらめら燃えている籠を背負うわされ、めかけを持った人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながっていた。血の池や、針の山や、無間奈落という白い煙のたちこめた底知れぬ深い穴や、到るところで、蒼白い瘦せたひとたちが口を小さくあけて泣き叫んでいた…」こどもの大宰は「子守」に連れられて、雲祥寺の地獄絵をみて、説明された。「連載 文学館への旅 斜陽館(青森県五所川原市)⑤ 重里徹也」

(2) …ごく一般的に、地藏さんと言えば、子供の仏さまということになっている。もっと話を具体化すれば、地藏さんは、地獄の鬼から子供を救ってくれるそうである。つまり子供の身代わりという現世利益と末世救済の両面をもつもので、わ

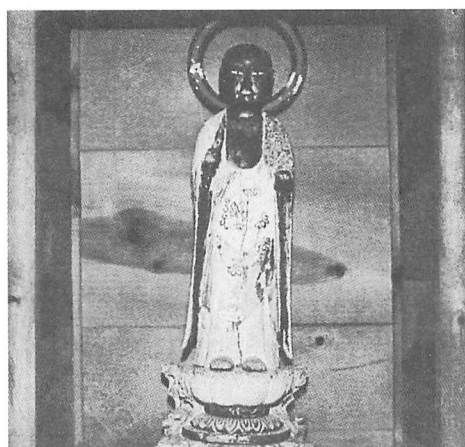
れわれにとつては、もつとも親しみやすい菩薩となる

最近、生まれた子供は殆どすくすく育つが、江戸から明治・大正にかけては、生まれた子供は、たくさん死んだ。家には先祖だけの墓地がある。約百基立っている。そのうち四十数基が地蔵さんである。地蔵さんは子供の墓で、なかには〈浮幻童女〉とか〈秋玉童女〉とか〈如幻童子〉とか、戒名も入っているものもある。亡くした息子は〈香玉寧光童子〉と戒名をつけてもらったので、それを入れた地蔵も先祖の墓とならんで立っている。そういう地蔵さんを拝む呪文は、おん かか びさんまゐい そわか という。これは息子を亡くしておぼえた呪文で、仏壇でも墓地でも唱えることが多い。歳月の経過により子供への執着は薄れ、地を見る日よりも、天を仰ぐ日のほうが多くなった。

本尊・地蔵菩薩像（本造）

天上に咲く花を誰か蔓珠紗華と言った。私は蔓珠紗華の咲く天へ召されて旅に立ったのかと秋がくれば、秋をさまようことにしている。（以下略）

「連載 莫山つれづれ榊
莫山」*莫山は書家



地蔵堂全景